

あなたの家を思う熱意

ヨハネによる福音書 2 : 13 - 22



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年3月3日

大齋節第3主日

上野聖ヨハネ教会にて

ユダヤ人の大切な祭り、過越祭が近づいたとき、イエスはエルサレムに行き、神殿の境内に入って行かれました。ここはイエスご自身にとっても大切な場所でした。

振り返ってみますと、まず生まれて約 40 日後に、イエスは両親に抱かれて神殿に行き、神に献げられました。そして毎年過越祭には、ユダヤ人の習慣に従ってイエスは家族やナザレの村の人たちと一緒にエルサレム神殿に礼拝に行かれました。12 歳のとき、イエスはひとり神殿の境内に残って、そこで学者たちと話をしていました。探しまわってようやくイエスを見つけた母マリアはイエスに、「どうしてこんなに心配させたの」と言いました。するとイエスはこう母に答えました。

「どうして僕を探したの？ 僕が僕のお父さんの家にいるはずだということがわからなかった？」

エルサレム神殿は神さまの家、そして神さまは自分のほんとうのお父さん。イエスにとっては自分のお父さんである神さまの家にいるのは当然のことだったのです。

イエスにとっても、多くの人々にとっても、神殿は神の家、祈りの家であり、神への逃げ場、神から慰めと励ましを受ける場所のはずでした。

それから 20 年近くがたちました。同じ過越祭の礼拝のために、イエスは弟子たちと一緒にエルサレムに上り、神殿の境内に入って来られました。その時、イエスが見られたのは、あるまじき光景でした。祈りとは正反対の現実です。そこにあるのは喧噪と、人々の欲望の渦巻きです。神を崇めるのではなく、神を利用して自分の権威を高め、自分の利益を増し加えようとする人たちがそこを支配していました。人々の素朴な信仰を利用して、あくどい商売がなされているのです。

イエスは乱暴な振る舞いをして、境内から商売している人々を追い出されました。その振る舞いを見ていた弟子たちに、聖書の言葉が思い浮かびました。

「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」

詩編 69 編 10 節の言葉です。「あなた」とは神のことです。神の家を思う熱意が自分の中に燃えて、自分を食い尽くす。詩編の作者は自分の激しい思いを歌っています。イエスのうちに神と神の家を愛する情熱が燃えて、自分を焼き滅ぼしてしまわれる——弟子たちは、イエスのこの振る舞いを見てそう感じたのです。

神殿を本来の姿に戻したい。祈りの家にしたい。わたしたちの教会も同じです。ほんとうの祈りの家であってほしい。

イエスのうちには神と人を愛する情熱が燃えていました。今日はそのことを知りたいのです。イエスが苦難を引き受けて十字架に死なれたのも、神と人とを愛されるこの愛の情熱のゆえでした。わたしたちが神さまとつながり、教会に連なったのも、イエスの愛がわたしたちに対して燃えたからです。

ところで今日の旧約聖書日課は出エジプト記第 20 章で、神が出エジプトの民に十戒を与えられたことが記されていました。その中に、今お話ししたイエスのうちに燃えていた情熱とつながる重要な言葉がありました。

「わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。」

出エジプト記 20:5

神はご自身をさして「**熱情の神**」、言い換えれば情熱の神、燃える愛の神と言われるのです。神はこの世界が、人類が苦しみつつ滅びていくのを放置できなかった。その愛の情熱のゆえに、救い主イエス・キリストをわたしたちに送ってくださいました。

今日の使徒書、ローマの信徒への手紙を書いたパウロもまた、神の愛の情熱、イエス・キリストの内に燃える愛の情熱に出会った人でした。今日の使徒書にこうありました。

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められた

この体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。」

ローマの信徒への手紙 7:24

このように呻いているパウロがいます。ところがここで突然パウロは「感謝」を叫ぶのです。

「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」 7:25

滅ぶしかない自分の現実を嘆き呻いていたパウロは、「わたしたちの主イエス・キリスト」に救われた。パウロはイエス・キリストとほんとうに深く出会ったとき、あのイエスのうちに燃えている愛の情熱を受けました。それで彼は別のところでこのように言います。

「だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられますでしょうか。」 コリントの信徒への手紙 II 11:29

信仰のつまずき、教会の悩みに苦しむ人のことを思ってパウロの心は燃えるというのです。イエスのうちに燃える情熱、その愛の火がパウロにも燃えていたのです。

ところで今日は「聖公会生野センターのための主日」と定められています。管区からの案内にはこう紹介されています。

「聖公会生野センターは日韓交流・大阪生野地域での街づくりの活動・障がい者の生活介護・在日高齢者のデイサービス

等幅広く活動をしています。』

聖公会生野センターの母胎は大阪生野の聖ガブリエル教会です。日本聖公会にあって唯一、在日朝鮮人のための教会として出発した教会です。その創立者は張^{チャンジュンサン}準相司祭、日本名は張本栄先生です。

張先生は日本統治下の朝鮮のメソジスト教会で洗礼を受け、日本に渡って立教大学に入学されました。しかし日本の植民地支配に反対する 1919 年の三・一独立運動に参加するために朝鮮に戻り、逮捕されて6ヵ月の懲役に服されました。やがて立教大学に復学。聖公会に移り、1923 年 4 月に堅信を受け、ヨハネと名付けられました。ところがその年の9月、関東大震災に遭われ、その時に起こった朝鮮人大虐殺に巻き込まれました。およそ 6000 人も朝鮮人が日本人に殺されたという事件です。張青年は、命からがら東京を脱出して、縁のあった奈良基督教会の吉村大次郎司祭に助けを求めました。今にも自分は日本人に襲われて殺されるかもしれない、という恐怖の中にあったといいます。吉村司祭は日本刀を出して来てこう答えたそうです。

「もしあなたを殺そうとする者が来たら、これでわたしを先に殺してからにせよ、と言ってやる。」

吉村先生は、命をかけてあなたを守ると言ってくれたのです。

吉村先生との出会いによってイエス・キリストの愛に触れた張青年は、日本で苦しむ同胞に何としてもキリストの愛の福音を伝えたいと願い、その年のうちに伝道者となるべく福岡神学校に入学されました。その後、大阪教区の支援を得て、生野に朝鮮人のための伝道所を設立されました。これが聖ガブリエル教会の前身です。ところが1941年12月8日、太平洋戦争勃発の日に張先生はスパイ容疑で逮捕され、獄中で拷問を受け、教会は強制閉鎖されてしまいました。

日本の敗戦後、張先生は自宅を開放して伝道を再開されました。リヤカーに醬油を積んで行商するなど、非常な苦勞の後に聖ガブリエル教会を開かれました。これがやがて発展して地域への奉仕活動をしようということになり、日本聖公会がこれに関わることになって「聖公会生野センター」が誕生しました。センターは今年で創立32年になります。

わたしがお話ししたことのほとんどは、張先生のご長女のチャンソソジャ張聖子さんから直接伺ったことです。なおわたしは10数年前に、チャンジュンサン張準相司祭のひ孫さんに京都で洗礼を授ける、という不思議な経験を与えられました。

今日お話ししたかったことは神の愛の情熱です。神のうちに

燃え、イエス・キリストのうちに燃え、そしてパウロのうちに燃えていた愛の情熱が、張準相先生のうちにも燃えていた。そのような歴史の事実が日本聖公会の中にあつたことを大切に記憶したい、ということです。

お祈りします。

神さま、どうかあなたの愛の情熱をわたしたちの心に注いでください。その愛がわたしたちのうちに燃えて、あなたを愛し、教会を愛し、隣人に奉仕させていただきますように。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン